

大會抄錄

朱全忠政權の成立

大澤正昭

唐末・五代の藩鎮割據體制の展開から再統一へ向かう過程に於いて、唐朝を打倒して樹立された最初の政權は朱全忠政權である。この新政權は、周知の通り、生産力の顯著な發展によりその經濟的地位を確立した江南ではなく、河南地域に直接的基盤を置いて成立した。そしてこの基盤は中國の再統一を達成した宋朝へ繼承されたと考えられる。このような、統一政權を生み出した河南地域の歴史の優位性は如何なるものとして把握するべきであろうか。いくつかの側面からの検討がなされねばならないが、その中の二、三の點について考察を加えたい。

安史の亂以後、朱全忠政權成立までの河南地域に特徴的な側面は、一つに、貨幣經濟の一層の浸透であり、また一つには、それと切り離して考えることのできない「驕兵」の問題である。即ち、安史の亂による農村の破壊は舊來の農村經濟體制の崩壊を一段と早めていたし、江淮漕運路に象徴される河南の經濟的位置は貨幣經濟の浸透を必然的にしていた。この結果、唐末を通じて、兵農分離と商業資本の展開が他地域に比してより推進されたと考えられる。これが宣武軍等の「驕兵」を支える基盤ともなっていたし、朱全忠政權の基礎となっていた商業資本の質をも規定していたのである。ま

た、李克用等の諸集團に先んじて「統一」政權を作りあげた要因ともなっていたと考えられるのである。

二十世紀中國の一棉作農村における

農民層分解について

吉田 法一

第一次大戦後の天津における民族紡績工業の發展と棉花輸出の増大による原棉需要の高まりは、華北農村における棉花栽培の普及を押し進める原動力となった。後進的な華北農村が世界市場に組み込まれていったことが、農民生活に如何なる影響を與えたのか、より一般的にいえば、半植民地半封建的といわれる中國農村經濟とは如何なる構造をもつものであったかを明らかにすることは、今日依然として重要な研究テーマである。中國革命の原動力である中國農民の革命性について語られることは多いけれども、二十世紀の農民生活——特にその土臺である經濟生活についての具體的實證的な研究は、意外に立ち遅れているのではないかと思われるからである。

ここでは、河北省東北河棉産區の中心に位置する豐潤縣米廠村において、陸地棉の栽培が農村經濟の動向に與えた影響を、以下の順序で考察したい。

(一) 全村がほぼ棉作專業農家へ轉化した米廠村では、競争の原理が貫徹し、經營規模較差・生産力較差が一部の上層農民を押し上げて富農に轉化し、他方大多數の零細農民をますます貧困化させてい

く。
 (一) 棉作の導入は商人・高利貸の農民收奪の機會を擴大し、農民の債務奴隷化が進行する。

(二) このような農民經濟の變化は、不可避免的に地主制に新しい對應をとらせることとなる。棉作地では前納定額貨幣地代が支配的となり、従来の大地主のほかに、新たに商人・高利貸などから轉身した小地主群が形成される。かくして、一九三〇年代の河北省の一農村では農民層分解の基礎の上に、富農經營と寄生地主化とが農民搾取の形態上で相對立しながら進行していく。

唐代河北藩鎮における交易について

畑地正憲

唐代における河北藩鎮（盧龍・魏博・成德等三節度使）の反動的・獨立的動きについては周知のことである。この河北藩鎮の獨立的動きは、強力な藩軍を編成し、支配地域（藩道）における稅物等の完全な私有によって支えられていた。これら軍事・財政等の側面については、先學によって明かにされたところである。

ところで、藩道と他地域との間の交易による物資流通を考察することは、河北藩鎮の經濟的側面を解明し、その地域性を明らかにする上で重要なことであると考える。

河北藩鎮における交易では、北邊におけるものと海上交易とを主要なものとしてあつづけることができる。ここでは、河北における

「行」の成立や、海上交易での新羅人の活躍、藩鎮の唐朝への進貢物等を手がかりとして、河北藩鎮における交易の問題を考察する。

「開禧用兵」と韓侂胄政權

衣川 強

南宋第四代皇帝寧宗の開禧二年（一二〇六）、四十餘年にわたる宋金兩國の平和状態が崩壊し、戰爭が開始された。南宋の權力者韓侂胄が、大いなる功績を立てて自己の立場を強化するために指導した戰爭であると言われ、當時の資料では「開禧用兵」と記録されている。この戦いは韓侂胄を謀殺し、その首を金へ送ることによって終結し、宋金間に五回目の講和が成立した。

韓侂胄の專權時代は寧宗朝の前半に當る。その間、道學とその學者の彈壓（慶元黨禁）を敢行し、ついで「開禧用兵」へ突入していった。この二つの事件は、韓侂胄を悪人として評價することを決定した。しかし、政治の動きとしてとらえてみれば、この事件は決して韓侂胄一人の活躍によってなされたものではない。韓侂胄一派とその反對派の間に複雑な抗争があった。さらに、看過し得ない要素として、いわゆる學者の動向がある。

韓侂胄一派が、開戦へ進むためにどのような人物をいかに配置したのか。反對派は、どのような経過でその權力を失ったのか。これらの問題を、中央政界の動きを軸に、「開禧用兵」をめぐる韓侂胄政權の人的構成を分析することによって明らかにしたい。